令和５年度　まちづくりカフェ　パネルディスカッション

地域で楽しく暮らすために
～自分ができること、やりたいこと～

開催日時：令和5年7月14日（金）18:00～20:00

開催場所：旧長井小学校第一校舎（長井市）

山形まちづくり株式会社 常務取締役
七日町商店街振興組合 事務局長

下田 孝志 氏

【コーディネーター】

岩手県出身。

まちづくり会社と商店街組織の両面から、中心市街地の魅力や価値の維持・向上を図る事業や活動をマネジメント。近年は、まちづくりの人材育成に力を注ぎ、高校生や大学生など次世代へのアプローチを重視した取り組みを進めている。経済産業省所管の中心市街地活性化アドバイザーや商店街相談アドバイザーを務め、全国各地のまちづくり支援にも携わる。

おぐに移住者コミュニティつむぐ創設者

横山 真由美 氏

【パネリスト】

小国町出身。

小国町役場に入庁後、「おぐに移住者コミュニティつむぐ」の立ち上げに関わる。町職員としてまたひとりの住民として、移住者同士の関わりや移住者と地域を巻き込んだまちづくりに取り組んでいる。

もの・まちづくりサークル縁 代表
山形大学工学部建築・デザイン学科４年

田中 杏我 氏

【パネリスト】

埼玉県出身。

米沢市を中心に空き家の改修やワークショップを通じて実践的なまちづくりに貢献し、大学生の居場所の創出や大学生と地域住民の交流の架け橋になれるよう模索している。米沢市が行っている官民連携によるまちづくり「東町プラットフォーム」に学生メンバーとして参加。

まちづくりの新たな視点

下田　お二人から本当に素晴らしいお話ありがとうございます。重要なキーワードがたくさんありました。今回、なぜ大学生の田中さんと、町職員の横山さんにこのようなお話をお願いしたか説明します。私は全国各地のまちづくりのお手伝いに行きますが、これまでまちづくりというのは行政と商工団体と事業者の三者でやっていました。それが現状どうなったのかということです。つまり、今までやってきたことを、これ以上延長しても活性化できないということです。

　ではなぜ、若者と子育てママ達なのか。七日町でも二つのターゲット層について、これまで無視をしてきたのではないか。まちづくりの中で若者と子育て世代を見てこなかったのではないか。結果として、このような状況になったのではないかということです。そのことに気が付いた地域から活性化し始めています。その世代に目を向けるのは何故かというと、これからどうありたいかを考えられる人たちだからです。「これまでどうだったか」ではなく、「これからどうありたいか」、「どういう地域にしていきたいか」を描ける人たちが、まさに若者でありお母さん達です。

　だって子供を育てるには、その地域を知っていないといけないんです。でも、そういった人たちを今まで重要視してこなかったのは何故かというと、お金を使ってくれないからなんです。基本的に商業者はやっぱりお金を使う人、まちにいっぱい来てくれる人にターゲットを合わせています。結果こうなってしまいました。まちを変えていけるのは、これまでじゃないやり方、これまでじゃない視点を持っている人たちだと思っています。

　それは大学生であり、子育てママであり、移住者の方々、外の目を持った方々だと思っています。そのような方々をまちづくりの中心に据えていく地域が、新しい価値とか魅力を作っていっているという事実があります。山形の中で大学のある地域は限られているかもしれませんが、ではなぜ、上山市に学生が行くんですか。上山市に大学はありません。だけど山形大学の学生は上山市のまちづくりに魅力を感じて行っています。移住者だって小国町にだけいるわけではありません。他の市町村にもいますが、何故小国町にだけ移住者のコミュニティができたのかということを、今日は皆さんと考えたいと思います。ポジティブに考えながら、次回の長井の未来を考えるワークショップにつなげていきたいと思っています。

サークル入部のきっかけ

下田　これから二人にいろいろと質問して進めていきます。よろしくお願いします。

　今回サークルの初代代表の佐々木さんが参加してくれていますけど、彼は私の高校の後輩なんです。我々は岩手から山形に来ていて、そこで素敵なまちを作りたいということで立ち上がったんです。田中さんは自分でサークルを設立したわけではないですが、なぜこの活動に携わろうと思ったんですか。何か地域の課題を解決しようという思いがあったんですか、それとも先輩に誘われてなんとなく入ったんですか。いろいろなきっかけはあると思うんですが、もの・まちづくりサークルに入ろうと思ったきっかけ、当時の思いを教えてもらえますか。

田中　私が一年生の時に、一

年生ながら何か建築の関係を作りたいと思っていて、そんな中でサークルができて参加しました。そもそも建築学科に入ったのが、まちを見るのが好きだったからということがありました。また、山形に初めて住んだ時に、コロナ禍で思うようにまちに繰り出すことが拒まれるような状況だったので、そんな中で学生の居場所ってどこなのかなと考えると、大学にも行けない、まちにも行けない、そしたら家しか居場所がなくて、そのような状況は寂しいなと思いました。

とはいえ、コロナ禍が明けたからといって、まちに自分たちの居場所があるかというとないと感じていて、そういう場所を作ったら、人が集まるきっかけやまちづくりを考えるきっかけになると思いました。そういった中でいろいろな人とつながって、今は米沢を中心に活動できています。

まちを愛するきっかけを作りたいということ、自分の気持ちをみんなに広げていきたいというのがきっかけになりました。

下田　大学生の中で今の考えを持つ人は一定数いるはずです。なぜなら、私が大学生の頃は、まちづくりを学科とするところはなかったですが、今はどんな大学でも、まちづくりや地域の活動を学ぶゼミなどがあります。そういった中で一定数興味を持っている人はいるので、地域がどれだけそれを広げていけるかというところに課題があると思っています。

日頃の生活にアンテナ

下田　私は先ほどの横山さんの話を、移住担当者になったからできたわけではないと思って聞いていました。つまり、日頃から横山さんが小国町でアンテナを張りながら、いろいろなことを考えながら生活する中で、自分が移住者の担当になった時に、その思いが伝わったんだと思います。だって、これまでも移住者の担当はいたわけですから。なぜ横山さんはできたのかということを教えてもらえますか。

横山　「つむぐ」を作ったきっかけですが、移住してきている方々をみて、単純に「この人たちは幸せに暮らしているのか」ということが気になってしまったということが理由です。遠いところから来て、知り合いがいなかったら寂しいんじゃないかという老婆心がありました。だから、女子会を開いてニーズを聞いてみようと考えました。

下田　七日町商店街の子育て施設に来るお母さんのほとんどは県外出身者なんです。それだけ相談する人が地域にはいないんです。おそらく、悩みがあった時にそういうつながりがあって、そこに一つのカテゴリーが存在していて、新しい情報を発信していく、そういう場を作ってあげることを地域の私たちや行政担当者が日頃からやって、そこで情報収集を図るべきだと思っています。アンケート調査をして、まちに長く住んでいる人ほどまちに不満を持っているということが明らかになっています。新しく来た人はポジティブなところを見つけることができるのですが、長く住んでいる人は「あそこには〇

〇がなくなった。〇〇が不便になっている」と言います。これから地域の新しい価値を作り出そうという時、どちらにアンテナを向けていくべきかを考えると、答えは自ずと「新しい価値・魅力を作り出そうという人たちとどのようにつながろうか」ということになります。エリアの価値を向上させる・高めるという思いは皆さんあると思っています。ただ、思いだけでそれが仲間たちに伝わるかというと、なかなか難しいのかなと思います。

自分なりの物差し

下田　そういった中で二人に聞きたかったのが、何かデータとか客観的な数値とか、そういったものを活用されているのか、なかったとしたら、何か自分なりの物差しがあれば教えてもらえますか。

田中　データはなかったんですが、自分の中の物差しとしてあるのは、「楽しいかどうか」です。楽しいかどうかが一番大事なのかなと思っています。まちづくりというのは、最初は参加してもその後は参加しなくなる人もいて、それって参加してみてあんまり楽しくなったということがあるのだと思います。楽しいというのは人それぞれあり、取捨選択できるような幅がないと、なかなかまちづくりって続かないと思っていて、楽しさの多様性を増やしていくことが大事だと思っています。

横山　データというほどのデータはないんですけど、私は、「つむぐ」の中では、俯瞰してみること、広い視野を持つことが役割だと思っていて、町内での移住者の立場やつむぐが求められていることを考えています。あとはみんなで仲良く楽しんで活動することが重要です。

下田　二人に共通するのは、LINEを使ってゆるくつながっているということ、また、個々の思いやつながりを大事にしているというところだと思います。イベントだったらみんな一斉にやることもあるかもしれませんが、基本的には個々のつながりが大事だということだと思います。まちづくりをやっていると、賑わいとか、楽しいとか抽象的な言葉が立ってしまうことがあります。賑わいの姿ってそれぞれ違うし、楽しさだって違うので、どこかでそれぞれの物差しがわかると個人や団体との接し方が見えてくるように思います。ですから、視察でいろいろな地域を見ても、今日みたいにどんな素晴らしい話を聞いても、自分の中に物差しがないと響かないと思います。田中さんであれば「楽しいかどうか」という物差しがあり、そのような物差しがあることはいいことだと思います。横山さんのように「俯瞰してみる」というのも物差しの一つだと思います。

街なかエリアでの活動

下田　二つめの大きいテーマとして、地域の中には街なか・市街地というエリアがあると思いますが、そこで活動する意義は何ですか。例えば、米沢でも地域づくりをするのは、必ずしも中心市街地とは限らないじゃないですか。アスモだって街の真ん中にあるんです。そういったところを活用

する意味合いはどう考えていますか。

横山　やっぱり中心部というのはみんなが来やすいですし、目立ちます。また、みんなを巻き込みやすい環境と言えます。そういう意味で、つむぐマルシェに出店する店舗が増えているのは中心部で開催したメリットかもしれません。

田中　米沢の中心というと上杉神社周辺になります。街の中心の要素というのは、歴史的な観点など様々絡んで複数の要素があると思いますが、そういった点を考えると、人が集まりやすい場所は何かしらのポテンシャルを持つ場所だと思います。そういったところで活動することで、今まで蓄積されたものを活かしつつ、学生などが新たな視点を活かして、またその場所のポテンシャルを活かして新しいまちを作り、そこを中心にもっと街が広がっていくと思っています。そういったところが中心市街地でやる意義だと思っています。

地域でのアプローチ

下田　移住者コミュニティについて、初めの頃は住民の方からの理解が得られなかったという話があったり、学生がやっていることについて「学生がやっていることだから」と斜めに構えて距離を置いている人がいたりしたと思います。地域の方との関係性の醸成や合意形成といった、地域の方から自分たちの活動を理解してもらったり、連携を深めていったりする際に気を付けていることとか、アプローチの際にこれだけは確認しておきたいということがあれば教えてください。

横山　三年間やってきて、やっぱり少し時間はかかるなと思っています。最初の一年目から地域に溶け込もうというのは難しいと思っていて、「ある程度時間がかかるものだ」と思いながら、徐々にやっていくことも一つだと思います。また、コーディネーターの役割を持つ人が地域とうまくつなぐことが必要だと思っています。

田中　そういう方々は一定数いると思います。自分たちが接してきて思うのが、そういう方々は、新参者に対して、自分なりの考えを強く持っているということ。その人たちがどのようにまちを捉えて、どのようなまちにしていきたいのか引き出すことが大事で、それをしないと自分たちの思いも通じないと思っています。そういう人たちの話をちゃんと聞いて、かみ砕いて理解することが一番大事だと思っています。

下田　私も時間がかかるものだと思っています。性急にこちらの都合でやるものではなく、相手がどう思っているかの調整をする必要が出てくる時もあります。一番批判してくる人は思いが強いわけだから、最終的に一番応援してくれるというのはどの世界でもあることです。そういった方を、いかに自分の支援者に変えていくかは時間がかかることですが、自分が話してダメだったら違う人に行ってもらうとかいろいろな方法があります。コーディネートが得意な人がいれば、地域の重鎮み

たいな人にお願いしたほうがいい時もあります。そういったところがポイントなのかなと思います。

どんな生活をするか

下田　最後の質問になりますが、今回「地域で楽しく暮らすために、自分ができること、やりたいこと」をテーマにしています。暮らしというのは、まちづくりの三つのキーワードの一つになっています。キーワードの一つ目はエリアを絞ってやっていこうという「エリアマネジメント」、二つ目がこれからのことを考えようという「未来志向」、そして三つ目が「暮らし」。その地域で安心して暮らしていけるということが大事だと思っています。そういった観点からも、地域の方としっかり議論することがまちづくりに一番大事なことだと思っています。

　そんな中で、横山さんは移住者の暮らしを手伝われていますが、横山さん自身は小国町に暮らしていてどんな暮らしをしていきたいと思い、どんな風に過ごしていきたいと思っていますか。たぶん移住者の方と同じ方向を向いているのではないかと思っています。

　私がまちづくりに関するワークショップで必ず最初に話すことは、活性化どうこうではなくて、どんな暮らしがしたいかということです。自分が住んでいる地域、仕事をしている地域でどんな暮らしがしたいかという視点から考え始めるとポジティブな意見が出ます。

横山　あまり考えたことがなかったのですが、緩やかにというか、しなやかに暮らしていきたいと思っています。女性のコミュニティを作ると、子育てをしながらなので、五人集まる予定のミーティングが二人だったり三人だったりということがざらにあります。「子育てしながらだからしょうがないね」という意見が当たり前で、それを責める人はだれもいません。「じゃあ、しょうがないからいる人でやろう」という流れになります。「つむぐ」の中では、お互いが補い合ってゆるく繋がっています。もしかすると、男性だけの集まりではこうはならないかもしれませんね。そんな風にみんなしなやかで、「やれるところまでやろう」「やれる人がやろう」という、雰囲気がすごく心地いいと思っています。

　暮らし方もあまりガチガチせず、ゆるく楽しみながらいろいろなことに挑戦できたらと思っています。

下田　うちの商店街でも子育てのほうが大事だからと理事を辞任する人が出てくる時代になりました。これはうちの理事長とも、時代だから受け入れようということになっています。昔だったら、商店街の理事だったら出てこいということになっていたかもしれません。でも今は「そうか。子育て頑張れ。子育てが終わったらもう一回やってみて」という考えに社会が変わって来ています。私たちはそういったところを理解しながら進めていく必要があると今の話を聞いて思いました。

　田中さんも大学時代の一年間は山形で過ごして、途中から米沢に移って三年くらいの時間が経ったと思います。そういった中で、学生としての三年間の米沢の暮らしがあるという視点で米沢のまちづくりを見たときに、自分たちが、暮らしという視点で「こんな活動ができればいいな」、「こんな暮らしがあれば楽しいな」ということがあれば教えてもらえますか。

田中　楽をしすぎない、苦労

する暮らしをしたいと思っています。例えば、私は全然雪の降らない地域から米沢に来て、車が三回くらい雪にはまってしまったことがあるんです。その時に助けてくれたのが、やはり地域の方々でした。私のアパートの前に住んでいる八十歳くらいのおじいさんが「こうするといいよ」とアドバイスをくれて、無事に車を動かすことができました。何でも今は一人でできてしまう世の中になっていますが、ちょっとした楽をしすぎない、苦労することがあるとそれを助けてくれる人は必ずいると思っていて、まちときっかけを持つためには、自分ではできないことを見つけることが大事なのかなと思っています。

例えば、自炊する学生が買い物に行って野菜を買うということがあると思いますが、野菜をあげたいという人もいて、そういった助け合う暮らしを学生の間でできると、いろいろなきっかけが生まれると思っています。そういったものを大事にしたいです。

下田　高校生と話しているとまさにそうです。大人なら簡単に解決できるようなことで悩んでいて、相談してもらえればすぐに解決するのにということがあります。大人は手伝いたくてしょうがなくなってしまいます。若い人たちが何かチャレンジしたい時に、「あそこに相談すれば大丈夫だ」というところが地域の中に出てくれれば、そんなに幸せなことはないし、それが暮らしの価値を上げていくことになると思っています。

楽しく暮らす

下田　時間になりましたので、最後に若干総括を聞いていただければ幸いです。九月にワークショップを控えています。長井のまちを実際に歩いてもらい、「自分がもし長井に住んだらこんな暮らしがしてみたい」とか、「こんなところが魅力なんじゃないか」ということを話し合いますが、外から見た人が見える世界と、長く長井に住んでいる人が見える世界とでは必ずギャップが生まれます。

実はうちの商店街では「七日町の強みは四百年の歴史だ」という商店主がいました。ところが、住民アンケートではそこに魅力を感じている住民は0人で、誰もそんなところを魅力だとは思っていませんでした。そういったギャップを楽しみながら、では何が魅力なんだろうということをワークショップをしながら見えてくればいいです。

ただし、大事なことは「楽しく暮らす」ということ。あとは「居心地がいい」、「過ごしやすい」ということです。おそらくそれぞれ感じるものは違うと思いますが、そこにはガチガチのものではなく、何となく緩さがあると思います。そこに共感できると、まちづくりに関わっていきたいという人が入りやすいのではないかと思います。

そんなワークショップをしますが、ワークショップのテーマはこうありたいなというもので妄想です。ただ、大人は妄想が苦手で、条件を与えられたうえで、最大限のものを生み出していくという仕事をしています。だけど、そういったものを全部取っ払ったうえで、本当はどうありたいのかということが大事です。これから九月までの一か月間妄想の訓練をしてください。日頃から妄想しておくと楽しいものができるので、これから一か月半くらいありますが、ぜひどうやったら楽しい長井になるか日々妄想しながら過ごしていただければと思います。本日の横山さん、田中さんの話はこの場ではもったいない

くらいのもので、全国に知らしめたいなという話を聞かせてもらったと思います。本当にありがとうございました。

（終）